

 労協連だより

田嶋 康利

4月17～19日の3日間、韓国の視察・交流に、加盟組織のメンバー19人と共に参加した(私は、先月に続いて2回目の韓国訪問)。

社会的企業コムウィン(パソコン及び周辺機器のリサイクル事業)の視察を皮切りに、京畿道地域自活センター協会との交流、韓国自活センター協会との懇談会、ソウル市長との懇談、ソウル市社会的経済課、ソウル市社会的経済支援センター、ソウル市青年仕事場ハブ、ソウル地域協同組合協会の視察交流などを経て、最終日には韓国労働者協同組合連合会創立総会及び祝賀行事に参加と、濃密な3日間であった。

韓国自活センター協会との業務提携の締結にあたって、協定締結の前提として、労協連永戸理事長より(1)双方にとっていちばんの課題となっている国の失業対策・就労政策はどのような制度として具体化されているか、(2)失業や就労、生活保護などの問題に対して、市民や地域はどういう役割を果たすのか、(3)それらの課題に対して自活センター協会、労協連が果たす役割や実践、事業運動のあり方として何が求められているか、以上について双方で議論しようと提案。11月の業務提携締結に向けて準備会議を開催することを確認。

また、今回の視察において韓国対案労働者協同組合連合会創立総会に来賓の一員として参加できたことは大変に光栄であり感動的な場面であった。1990年代における労

協連設立の失敗を経て、対案企業連合会、自活センター協会などにより連合会の設立が準備され、正会員6、予備会員9、準会員7でスタート。創立総会では、連合会の定款と規約、初代役員の選出、今年度の事業計画などを確定、宋インチャン・ハッピーブリッジ理事長が初代会長に就任した。宋会長より「協同組合基本法が施行された後、国内に4,000の協同組合が設立されたが、最も重要な協同組合である労働者協同組合は少数に過ぎないのが現実。連合会が労働者協同組合の設立と転換を制度的に支援する求心力の役割をはたすことになるだろう」と挨拶。また、2003年に発足した韓国対案企業連合会を引き継ぎ、国際協同組合同盟(ICA)、国際労働者協同組合連盟(CICOPA)の準会員資格を発足と同時に得た。

日本の労協連を代表して永戸理事長より、日本の労協の歴史を紹介するとともに、「働く者や市民とはどういう存在か、いつも問い続けることが大事だ。日本においても韓国においても失業と貧困にどう闘うかがワーカーズコープの主要なテーマ。そのための理念や原則、私たちのやり方はどうあったらよいのかが問われます。おそらく両国の政府とも、失業や貧困の問題は政府や行政だけでは解決されないことは認識されていると思います。市民や働く者が主人公になっていく地域をどうつくるか。そのことが失業問題や貧困を克服する大きな力

になっていくと思います。…私たちの最終的な努力は、組合員がいかにして主人公となる協同組合をつくるかということにあります。韓国の労働者協同組合と日本の労働者協同組合が共に手を携えて、アジアの中で本当のワーカーズコープを組織していくためにお互いがんばりあいたいと思います。今日はその輝かしい道への第一歩だと思います。お互いの組織の弱点もしっかり見つめ、考えつつ、ワーカーズコープがどうしたら発展するか、手を携えて道を切り拓いていきたいと思います」と連帯の挨拶。

韓国では2013年の協同組合基本法の施行以降約4,000の協同組合が設立されているとの報告を受けた。労働者協同組合の数は2014年1月現在259と全体の7%であるが、ソウル市の社会的経済政策の中において「地域共同体基盤協同組合の活性化の7大戦略分野の協同組合モデル」の一つに労働者協同組合が位置づけられている。韓国における労働者協同組合とその運動事業の発展を祈念すると共に、私たち日本の協同労働運動の発展に向けて奮闘していく決意を新たに韓国訪問であった。

ソウル市長からは、11月17～19日にソウルで開催される国際社会的経済協議体の創立総会への参加も直々に要請されるなど、内容の濃い懇談であったと聞く（代表との懇談）。

以下、「韓国対案労働者協同組合創立宣言文」を紹介する。

21世紀に入り、今現在までの平穏でバラ色の希望は失われてきました。より良い環境をめざしてきた人間によって始まった結果であるといっても過言ではない有害な環境、現在まで成長する道だけを追いかけていくことを考える時代に私たちは生きています。

21世紀の私たちには“持続可能性”という大至急な課題があり、これから生きていく次世代のための環境づくりは、現代において重要な論点です。

対案労働者協同組合連合会は、このような課題が残されている環境の中で、労働者の自主性の回復と“持続可能性”を生み出すための私たちの意志を表明する場です。

労働者の自主性が回復されることで、倫理社会につながりが広がり、あたたかい世界になります。自ら責任を持つ姿勢が社会を変化させ、より良い世界をつくることができます。労働者協同組合は、人のそれぞれの仕事を通じて、社会を変える大きな運動であり、生き方でもあります。自ら所有していること、共有していること、地域社会と連帯することが労働者協同組合においては基本的な原理です。私たちの歴史には、各時代における課題を新しい考え方で未来を準備し、堂々と生きてきた誇らしい歴史と伝統があります。

私たちがいま立っている場所は、過去に積み重ねてきた経験だけで解決できないことがあります。その際に、私たちにはその解決策として新しい変化が要求されます。皆さんは、未来に対してどのように考えて

居ますか？ 未来とはそれに対して問う主体が重要だと考えます。個人の未来だけではなく、私たちに未来とは何かということ問うこと、それが協同のはじまりであり、続けていく過程ではないでしょうか。

協同の価値を認識し、そして参加する私たちは、社会から疎外された弱々しい個人ではありません。人間は社会的動物であり、遺伝子によって行動する動物とはちがいます。人間は自らの意志と教育、参加の過程により協同する生き物として、生きていく訳です。協同する人間は、私たちが生きる21世紀に向けていくべき人間像であると強く訴えます。私たちは生まれてから、あらゆることをそれぞれが選択し、教育されることで、やがて協同する人間へと成長していきます。このような協同する人間が意志を持って集まることで、世界は変わると信じています。これこそが私たちがこれからつくっていく未来の形であり、労働者協同

組合の連合体である対案労働者協同組合連合会が次の世紀を準備しつつ望むべき理想です。

協同と革新は互いに相反する概念ではありません。むしろ、多様性が一つのものを志向することを意味する協同こそが革新の基になり、基本と言えるでしょう。自発的な協同は革新を加速するエンジンである動力です。労働者協同組合のビジョンは、協同する人びとを基盤に多様な分野から革新をつくり出すことです。これからは労働者協同組合実践の時代です。私たちが立っているこの場における課題を清い目によく見て共有し、私たちに必要な未来は何かと、望んでいる未来像を聞くことから始めましょう。さびしく一人でいかないようにしましょう。提案します。共にいくこと、互いにあたたかい視線を交換することで、私たちの協同の時代を始めましょう。

2014年4月19日